慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヘンリー・ペリング著 イギリス労働組合運動史
Sub Title	Henry Pelling; A history of British trade unionism
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1964
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.57, No.4 (1964. 4) ,p.347(77)- 351(81)
JaLC DOI	10.14991/001.19640401-0077
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19640401-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

がその成功を妨げ、挿木された資本主義は順調に成長できなかった。けれどもアメリカ資本主義は、すでにT郡をしっかりと把握していた。アーノルドが購入する農業機械や彼の生産する農産物が、彼に対して利益をもたらす以上に、いわゆる「独占」の利益に奉仕することが、彼をして農民運動の指導者たらしめたのであった。

（1）本稿はカーティー教授の研究の忠実な紹介ではない。教授の研究は、フロンティアがアメリカ民主主義を促進したというターナー学説を、T郡を対象として、社会、経済、政治、文化の各面から、計量的方法をも採用して、実証したものである。

次号目次

論説

経済的自由についてのケインズとフリードマンの思想……千種義人

正義者同盟成立の歴史的意義（その一）……飯田鼎
——黎明期におけるドイツ労働運動の国際的性格にかんする考察——

研究ノート

農業生産函数に関する整理……鳥居泰彦

書評

ペラン『マンス考』……渡辺國廣

ミン・シュン・リー『一六九六年から一六九九年までの貨幣大改鋳』……飯田裕康

新刊紹介

書評

ヘンリー・ペリング著『イギリス労働組合運動史』

(Henry Pelling; A History of British Trade Unionism, 1963, London, xi+pp. 287)

飯田鼎

イギリス労働運動史にかんする古典的な通史といえば誰しも、シドニー・ウェッブ夫妻の「労働組合運動史」(History of Trade Unionism, 1920. 山川均・荒畑寒村共訳、板垣書店、上下二巻) G・D・H・コールの「イギリス労働運動史」(A Short History of British Working Class Movement, 1948, 林健太郎他訳、全三冊、岩波現代叢書) をあげるのに躊躇しないであろう。そのほかにも最近では、マルクス主義の立場に立つものとして、たとえば、アレン・ハットの「イギリス労働組合運動史」(British Trade Unionism, A Short History, 1848. 塩田庄兵衛訳、理論社) モートンとテートの共著「イギリス労働運動史」(Morton and Tate; British Labour Movement, 1858) などがあげられる。またわが国においては、山中篤太郎教授の「英国労働運動史」(同文館) がある。それぞれ、特色と個性のあふれた研究であるが、コールとハットおよび山中氏の労作は一九五〇年代にまでふれているのに反し、ウェッブ夫妻やモートンの研究は一九二〇年代までで終っているのは惜しまれる。ウェッブ夫妻は、第二次世界大戦後まで存命だったのに、一九二〇年代の労働運動史をまとめることなくして歿したのはまことに残念というほかはない。モートンとテート（テートはこの著作が現われるまえに急逝）の研究が、やはり一九二〇年代で終ってしまっているのは何故なのかその理由は明らかではないが、モートンの手によって、その後の運動史がまとめられるよう期待してやまない。

さてここに紹介を試みるH・ペリングの著作は、その意味では、われわれの渇望を充たすためにあらわれたといっても過言ではない。つぎのような内容から成っている。

第一部　労働組合運動の出現

第一章　設定

第二章　その起源——一八二五年まで

第三章　昂まる希望と小さなはじまり——一八二五年から六〇年まで

第四章　圧力団体の形成——一八六〇年から一八八〇年まで

第二部　労働党の強化

第五章　設定

第六章　新組合運動と新しい政治——一八八〇年から一九〇〇年まで

第七章　タッフ・ヴェール判決から三角同盟まで——一九〇〇年から一九一四年

第八章　戦争とゼネラル・ストライキ――一九一四年から一九二六年まで
第三部　国民的統合の諸問題
第九章　設定
第十章　停滞と復興――一九二六年から一九三九年まで
第十一章　責任のある権力の座に――一九三九年から一九五一年まで
第十二章　守勢に立って――一九五一年から一九六二年まで
結論

本書をよんでまず感ずることは、著者の立場は、G・D・H・コールの流れをくむフェビアン左派の思想であり、いちじるしく啓蒙的色彩の濃い入門書であることである。といってもそれによって本書の価値はいささかも減ぜられるものではなく、むしろその平明な叙述は十八世紀から現代までのイギリス労働運動の発展の全貌を把握させるのに充分である。以下にその問題となるところを指摘し、論評を加えてゆきたいと思う。

著者は第一部・第二部および第三部のはじめにそれぞれ「設定」(Setting)という序説をおいて、問題を提起している。第一部においてもっとも興味深い問題は、労働組合の起源にかんする著者の見解である。イギリスにおける労働組合の起源については、ウェッブ夫妻とブレンターノとの間におこなわれた古典的論争があることはよく知られている。労働組合の起源を中世のギルドに求めるブレンターノにたいして、ウェッブはこれを否定し、近代的なプロレタリアートの原型ともいうべき「ジャーニーメンの組合」(journeymen's association)の中に見出している。著者はこのウェッブ夫妻の主張の上に立ちつつ、友愛組合(friendly society)の重要性を指摘する。著者はイーデンの「貧民の状態」から「十八世紀のはじめ以来、友愛組合がイギリスの大部分に、次第にひろがった」という事実を引用しているが、これと一七九三年、政府が「友愛組合法」(Friendly Societies Act)を制定して、それを法認し且つその基金に保護を加えている事実を比較するならば、労働組合の発展の過程において、とりわけ職人の「渡り歩き」("tramping")なども、労働組合というよりも共済的な友愛組合間に行われたのではなかろうか。横断的なクラフト・ユニオンの秘密は、実はこの友愛組合の広はんな存在に負うているのであって、団結禁止法下におけるその友愛組合としての偽装の事実も、実はこの両者が不離一体の関係にあったことを示しているとはいえないであろうか。なおわが国における横断組合の伝統が途絶えてしまったのも、共済的な友愛組合の組織的発展が不充分であったことにもよるのではなかろうか。

著者は、一八二五年、団結禁止法の撤廃以後六〇年代までを、「昂まる希望と小さなはじまり」としてクラフト・ユニオンの形成期として問題を提起する。すなわち各職業別に発展する同業クラブ(trade club)――著者によれば、そのクラブが、その機能の友愛組合的側面を強調する程度というものは、団結禁止法以前に生れたか、それともそれ以後に生れたかにかかっているというのだが――要するにこのような同業クラブがロンドンをはじめ大きな都市の熟練職種の間には支配的であった。これらは、「トランピング」を媒介としてやがて全国的なクラフト・ユニオンを形成する方向を歩んだのであって、その中には綿業労働者、炭坑夫、建築労働者、指物師の組合などがあげられている(pp. 28～30)。著者は、労働組合の組織の発展の様相を具体的に指摘し、チャーティスト運動のような革命的政治運動の背後で、いわゆる「組織づくり」が、どのような形で行われていたかを明らかにしようと努力しており、従って、ウェッブ夫妻のように、一八五一年の合同機械工同盟の成立をもって、イギリス労働運動の画期とするような公式的な規定を注意深くさけ、機械工同盟の成立とならんで、各地に各職種に全国的な組合が、いわば同時的並列的におこったということを指摘している点は注目に値する。ただここでも、産業革命によってより多く影響をうけた産業、たとえば綿業、毛織物業、機械産業、炭鉱業などの労働者の組合とその影響をうけることが比較的少なかった指物師、建築工、陶工および装飾ガラス工などの熟練を主とする組合との組織上の比較、労働力の構成の相違などがあまり問題にされていないのが残念である。すなわち、それはそのつぎの問題とも関連があるのであるが、アップルガース(Robert Applegarth――建築および指物師組合)、アラン(William Allan――合同機械工同盟)、グァイル(Daniel Guile――鋳鉄工友愛組合)、クールソン(Edwin Coulson――煉瓦積み工組合)およびオッジァ(George Odger――靴工出身)を中心とするウェッブ夫妻のいわゆるジャンタは、一八六〇年に創立されたロンドン労働組合評議会を根拠として、運動を指導していたのであり、とくにオッジァの組織的才能はすばらしい威力を発揮したといわれるが、産業革命期における労働問題の起点ともいうべき炭坑労働者、綿紡績労働者および農業労働者の組合の指導者が、ジャンタから排除されたのは何故であるか、明らかではない。すなわち、一八八〇年の独占段階以前の段階において、P・ブラウンのいわゆる "Operatives' Union" と "Craft Union" との関係が明確に把握されていないのではなかろうか。そうでないと、一八八〇年代における炭坑労働者をはじめ不熟練労働者の覚醒、とりわけ後者の社会主義への傾斜などの理由を説明できないと思うのである。

著者は、一八六〇年におけるロンドン労働組合評議会とそれにつづくジャンタの結成、そしてさらに労働組合総評議会の結成をもって、とくに自由党との関係において「プレッシア・グループの形成」(Formation of a Pressure Group)という表現をとっているのは興味深いものがある。それは労働組合総評議会(Trades Union Congress)が、労働組合の勢力を掌握するための重要な機関であり、とくに一八八〇年代において社会主義者が労働組合評議会においてかなりの影響力をもっていたことは、T・U・Cの代議員の選出方法をめぐる派閥的抗争をみれば明らかである(①組合の代表者は一〇〇〇人につき一人であること、②労働組合評議会の代表は、組合の代表とかちあわないようにすること――つまり排除すること、③職業につかなかった人や有給の専従として活動している者も代議員たりえないこと。この措置は、職業的な組合活動家――主として社会主義者から成る――を指導部から排除しようとする旧組合主義者の意図を反映する――)。以上の

ような事情についてはかなり詳細にふれられている。

しかし一八八〇年代における新組合運動の勃興以後の本書の叙述は、主として労働者階級の政治的な関心、とくに労働党との関連においてふれられており、その限りにおいて労働組合の組織形態をとりあげていることなど、問題とすべき点は少くないが、それでも筆者独自の見解が至るところにみられる。たとえば著者は、新組合主義の特徴は、㈠不熟練および低収入の労働者の要求に合致すること、㈡低廉な入会費および組合費、㈢給付によるのではなくして、攻撃的なストライキの戦術、㈣雇用形態のいかんを問わず、労働者を組織することなどをあげ、一八八〇年代から九〇年代にかけて、社会主義が労働者階級に大きな影響をあたえたことを認めながら、それがたとえばT・U・C・内部において圧倒的な勝利をえたかのように説くウェッブ夫妻とコールの見解に反対している。すなわち、もしそうだとすればさきにのべたようなT・U・C・の代議員の選挙規則の改正は行われなかったはずであるというのであり、T・U・C・そのものを指導者の権力闘争の場として把握しているのは正しい。また二〇世紀初頭のいわゆる「労働の大不安」(The Great Unrest)の原因についても、㈠一九〇九年から一三年に至る物価の上昇にともなう組合の産業行動、㈡労働党の失敗、㈢マルクス主義およびサンディカリズムの浸透、この事件を契機とする三角同盟の萌芽――産業別労働組合への方向への起点として把握。

一九一四年から二六年までの第一次世界大戦、戦後そしてゼネラル・ストライキとつづく一二年間は、労働党の戦争協力、そしてさらには第一次労働党内閣にみられるような政府にたいする反対勢力から政権担当者としてのブルジョア勢力との妥協抱合の時期であった。その間に、ロシア革命および戦後の深刻な経済危機などの問題をはらんで、労働運動は左右に動揺をつづけた。著者によれば、この時期の組合運動の特徴は、古い組合勢力としての「石炭業および綿業の組合の力は相対的に衰え、運輸一般労働組合にみられるような新しいゼネラル・ユニオンが運動の指導権を掌握するに至った(pp. 180～181)。この時期における最も大きな問題は、労働党政府と労働組合の指導部としてのT・U・C・との矛盾であり、とくに、一九二一年にT・U・C・の総務委員会(the General Council)が設立されて以来、政党としての労働党とT・U・C・との矛盾は一層激化したことである。それは、指導者W・J・ブラウンの一九二五年のT・U・C・におけるつぎのような発言からよみとることができる。

「下院における労働党の完全な多数派、従って安定的である労働党政府をもってしてさえも、一方における政府、他方における労働組合の間には、永久的な見解の相異が存在するであろう。……労働組合というものは、政府の機能よりも、遂行すべき異なれる機能をもつものだ」(p. 172)。

運輸・鉄道および石炭業の労働者のいわゆる三角同盟を主体とするゼネ・ストが失敗せざるをえなかった理由はすなわちそこにあった。

もちろんこのような対立は、一九三〇年代におけるファシズムの脅威に対抗するための統一戦線の結成、さらにそれにつづく第二次世界大戦の過程において緩和されてゆくのであるが、ゼネラル・ストライキにつづく一九二七年から三九年までの間に、組合運動は、ゼネラル・ユニオンがいちじるしい発展を示した。全国繊維産業労働組合(National Union of Textile Workers)や運輸および一般労働組合(Transport and General Workers' Union)、一般および自治体労働組合(General and Municipal Workers' Union)などの大組合が出現して、労働市場における独占的地位をしめたのである。著者はさらに、一九三九年から五一年までの第二次大戦中および戦後の労働党内閣のもとにおける労働組合運動、その労資協調的な傾向と、その後、保守党政権のもとにおける労働組合の停滞的な傾向についてくわしくふれている。

本書はさきにのべたように、労働運動史の入門書として、すぐれた明快さをもっている。よみ終って感ずることは、コールやモートン、アレン・ハットおよびウェッブ夫妻の通史と比較して独自の個性をもち、とくに著者の研究領域である労働党史の叙述および労働党と組合との関係においてみるべきものがあるが、しかし叙述が分析的でなく説明的であり、立体的な視角に欠けているように思われる。組合運動の流動的な側面については非常によく描かれているが、組合相互間の関係や対立関係などの矛盾する側面の分析は、たとえば沖仲仕労働組合と運輸および一般労働組合の間の仕事区分の問題(demarcation dispute)などにおいて多少ふれられているが(pp. 243～244)、比較的稀薄であるように思われた。しかし労働組合の動きと労働党との関連を克明に追求したものとして、すぐれた入門書ということができる。

(London, MacMillan and Co., Ltd. 1963, ¥2520)

ジャニーヌ・ブイスヌーズ著

『コンドルセー

――大革命の中の啓蒙哲学者――』

Janine Bouissounouse; Condorcet. Le Philosophe dans la Révolution, Hachette, 1962. pp. 319.

野地洋行

ダランベールの親友、大臣チュルゴーの協力者、ヴォルテールの知己、つまり百科全書派の一員であるとともにその正統の相続人としてフランス革命の中に生き、その一端をになったコンドルセー侯爵は、その波瀾の生涯によって伝記作家の興味をそそるばかりでなく、われわれ社会科学を学ぶものにとっても、一つの思想の実験者として重要な研究対象である。

フランス革命は啓蒙思想によってひきおこされたのだ、というような一面的な解釈を生むほど、フランス革命に果した啓蒙哲学の役割は大きかったが、それだけに、啓蒙哲学者が革命の現実の中でどう思考し、どう行動したかは、啓蒙哲学そのものの性格を明らかにする上に大変重要な問題となってくる。革命は啓蒙思想の社会的実